

空蝉

ヨコテ

四方を山に囲まれた小国は、絶えず近隣諸国の脅威にさらされていた。しかし、その険峻な地形と希代の英傑、黒川信光の存在により領地深くまで侵されることはなかった。

「黒川は何処におる」

このたびの合戦も黒川の見事な働きにより、すでに大勢は決していた。敵兵は国境へと雪崩を打って逃げており、小高い丘に陣を張った殿は、目を細めて遠くを見やり、褒めの言葉をかけようと黒川を捜していた。

「黒川は最後まで自分ひとりでやろうとする。何もかもひとりでやりたがる。それが出来てしまうからうるさくは云えんが、ほどほどにしてもらわんとな」

殿は近習の倉沢に、同意を求めるように笑いながら云った。

倉沢は畏まるばかりだった。

「黒川も充分気が済んだであろう、戻るように伝えよ」

黒川は雑兵相手にも手を緩めようとはしなかった。鬼の形相で、もう一蹴散らしとばかりに、逃げ惑う雑魚の群れの中に馬を突っ込ませる。たとえ後に続くものが遅れ、周りに味方がいなくなったとしても怯むことはなかった。黒川の射抜くような眼光に睨まれた敵兵は、それだけで腰が砕けてしまい、馬上から振り下ろされる黒川の長刀の餌食になるしかなかった。

「深追いせずに戻って参れとの、殿の仰せでございます」

近習の倉沢が黒川の近くまで馬を乗り付けて云った。倉沢とは付き合いが古く、黒川はまだ働き足りない顔をしたが、しゅしゅ手綱を返し、殿の元へ戻った。少し息が上がっていたが、まだ疲れてはいなかった。

「お呼びでございましょうか」

「うむ。いつもながらそちの働き、天晴れじゃ」

「ははあ、有り難きお言葉」

「今日はもう帰って躰を休めよ。あとの始末は他のものにやらせる」

「大勢は決しましたが、今このときこそ敵を殲滅する絶好の機会かと思われませんが……」

「これだけ叩いておけば敵もしばらくはおとなしいであろう。無理をしてお主に怪我でもされてはつまらん。敗残兵は長井にでも任せておけ」

ははあ、と謹んで頭を垂れた黒川だったが、内心は苦虫を噛み潰していた。後を任される者が気に入らなかった。

長井政晴――才知を鼻にかけるだけの、戦場では役立たずの男だ。戦闘が重要な局面であろうと死ぬ気で戦おうとはせず、御身大事と配下の者たちで周りを固めている。自己演出がうまく、帳尻あわせに長けているだけの腰抜けに過ぎない。最近では殿の嫡子、義信様を籠絡し、その意向を頼みに軍議の席で具申するようにもなった。若輩者のくせして生意気な口を叩く。

長井にしても同じ思いだった。

黒川信光――諸般において思慮が浅く、蛮勇なだけの男だ。他を顧みようとはせず、あるのは己の武名を轟かせることだけ。確かに武芸には長けている。長刀を持たせれば天下無双の黒川に、武芸ではとても太刀打ちできない。何とか殿の役に立ちたいと思い、黒川への対抗の意識もあって必死に兵法を学んだが、活かす機会は一度も与えられなかった。軍議の席で私見を申し述べてもいつも黒川は、はなから馬鹿にした態度で聞く耳を持たず、他の者もそんな黒川に追従している。英傑である黒川の顔色を窺うばかりで、長井は孤立していた。いくら妙案を出したところでまともに取り合ってはもらえなかった。

殿の命令とはいえ、長井政晴は敗残兵を追い払うだけの役目に不満を持っていた。自分を活かせるのはこんな雑務ではない。己の力を存分に発揮できるのは、人馬を統率し、流れるように動かす兵法だと思っていた。

長井隊の兵は逃げる敵兵を容赦なく斬り捨てた。自分たちが主流でないのは自覚しており、憂さを晴らすかのように、命乞いをする敵兵を斬りまくった。逃げ惑う敗残兵を追い回しながら、長井は湧き上がってくる悔しさを虚しく抑えるしかなかった。

いつになったら殿は儂を認めてくださるのだろう。飼い殺しのような今のままなら、他家に仕えるなど考えを新たにしなければならぬかもしれない――。

すると、雑兵を追いかけていた山道の先に兜の武者が見えた。単騎で駆けており、周りに雑兵の姿はない。長井隊の兵士は色めき立った。見目鮮やかな兜は遠目に見ても際立っている。地位のある武將に違いない。

「あの兜首で御武勲を」

進言する足輕に長井は大きく頷いた。

武勲をあげる、これ以上ない絶好の機会だった。

日頃、自分に対して小馬鹿にしたような態度を見せる黒川の鼻をあかせると思い、曲がりくねった山道に馬を急がせた。足輕たちがあとに続く。兜の武者は後ろから追いかける長井に気づき、何度も振り返りながら馬を走らせた。その距離はなかなか縮まらなかった。絶妙に保たれたままで、追尾を諦めるほどでもなく、かといってすぐに追いつくことも出来ない。長井は不審に思った。逃げているはずの兜の武者に必死さが窺えない。わざと一定の距離を保っているようで、奥へ奥へと誘っているように感じられる。

不穏な空気に、長井は馬の脚を遅くした。すでに国境を過ぎており、不案内な地に足を踏み入れていた。先を見やると、隘路の両側は小高くなっていて、繁った木々に覆われている。兵法を学んだ長井には、そこが兵を隠し、待ち伏せする絶好に地形に見えた。

長井の動きに合わせるかのように、先を走っていた兜の武者も走りが遅くなった。ついには馬を止め、じっと長井を見返している。長井にはそれが、この首欲しくばここまで来い、と挑発しているように思えた。

「ものども、これまでじゃ。引き返すぞ」

ともの従者たちは訳が分からず戸惑った。もう少しで追いつけるのに諦める気が知れない。しかし、長井の命令には従うしかなく、落胆の肩で引き返した。

「臆されたか……」

ひとりの足軽が吐き捨てるように、ぼつりと呟いた。

翌日、勝利した戦の労をねぎらうために主だった家臣が集められ、酒宴が開かれた。

「この度の皆の働き、見事であった」

笑みを浮かべて一同を見渡し、殿が満足げに云う。

「一番の働きは黒川信光であった」

黒川は、さも当然という顔で平伏した。

「いつもながらのそちの働き、感じ入ったぞ。まさに百人力であった」

「殿のためならこの黒川、命など惜しくもありません」

殿の笑みがさらに大きくなる。

黒川は殿の寵愛を感じ、嬉しそうに再び頭を下げた。しかし、その寵愛が盤石でないのを密かに恐れてもいた。殿の変心はしばしばで、気に入らないことがあるとすぐに激昂される。ことに、戦での不始末には厳しく、何人もの家臣が詰め腹を切らされてきた。いつ、自分がそうなるかわからない。今日も殿の責めを負う者がいる。平伏したまま黒川は、そっと長井の様子を盗み見た。

「黒川のような者ばかりであればいいのだが……臆して兜首を獲り逃がした者がおる」

真顔になった殿が遠くを見据えて云う。その視線がおもむろに長井に向けられた。

「申し開きがあるか、長井」

一同の目が長井に注がれる。

「臆したとは心外な。この長井政晴、一度も臆したことなどございません。おそらくは山道にて兜首を獲り逃がしたことを責めておられるのですが、あのまま突き進んでいたら敵の策に嵌り、我が隊は全滅となっていたでしょう。あの地形を見るに、敵が潜んでいるのは明らかでした」

黒川は不敵な笑みを零した。近頃、増長している長井を蹴落とすには絶好の機会だと思った。それに、長井を擁護する物好きな武将は誰もいない。思う存分いたぶってやれる一一。

「……して、潜んでいる敵を見た者がおるのか」

黒川は意地悪く訊いた。

「見た者はおりませんが……」と、長井が答えに窮する。

「誰も見ていないのに、そこに敵がいるとは可笑しなことを……」

「我らを隘路に誘い込もうとしていたのは明白で、兵法の常道です。わたしならきっとそうしております」

「いもしない敵がいたとは……兵法とは便利なものよのう」

鼻で笑い、聞こえよがしに黒川は云った。

「愚弄なさるか、黒川殿！」

斬りかからんばかりの勢いで長井が怒鳴る。

他の武将たちがざわめき、長井に非難の目を向けた。

「殿の御前ですぞ、控えなされ！」

殿の嫡子、義信の一喝に長井は恭順した。辺りが静まり、義信はおもむろに口を開いた。

「黒川殿も一番手柄とはいえ口が過ぎます。長井殿が臆されたのなら国境を越えてまで敵を追っては行かれなかったでしょう。以前から感じておりましたが、どうも黒川殿はむやみに長井殿を軽んじておられるようで、残念でなりません。確かに武芸では、長井殿は劣っているかもしれませんが。しかし、長井殿にも優れたところがあります。この義信、長井殿から兵法の素晴らしさを聞き及んでおりますが、未だ実践にて活用されることがなく、口惜しく思っておりました。長井殿の兵法は立派なものです。必ずや我が軍にとって有用なものとなるはずです。父上、一度、長井殿に機会を与えてはいかがでしょうか。そうすれば長井殿がいかに優れた武人か、途中で逃げ帰るような腰抜けかどうか、判然とするはずです」

「我が軍の命運をその兵法学者に託されるのですか」と、黒川は呆れたように云った。

海のものとも山のものともつかぬ長井の兵法を、あまりに過信している気がする。そして、義信の長井に対する信頼が篤いのを改めて思い知らされ、心中に焦りを覚えた。

殿がゆっくりと目を閉じ、深く息を吸って黙考を始める。

黒川も他の武将も、固唾をのんで殿の決断を待った。咳一つなく、音を立てるものは何もない。静寂の中、時は過ぎた。

やがて殿が静かに目を開いた。

「義信がそこまで云うのであればよほど覚悟があつてのことであろう。次の合戦の折には義信を総大将とし、軍議は長井に任せてみるとうしよう」

決意の口調で朗々と述べる姿は威厳に満ちていた。

思いがけない殿の言葉に長井が、信じられないといった顔で、涙を流さんばかりに平伏した。そんな長井を嬉しそうに眺め、義信も父である殿に頭を下げた。

「ただし、少しでも不利な戦況に陥ったなら兵法はやめじゃ、よろしいな」

義信も長井も黙って力強く頷いた。

長井に軍議が任される――

黒川は苦々しかった。

軍議に興味があつたわけではないので他の者だったら素直に殿の命に従えたが、相手が長井となると話は別だ。何の軍功もない、若輩者の長井に指図され、駒のひとつとして使われることなど我慢がならなかった。

「殿は国を滅ぼされるおつもりですか。今一度お考え直しを……」

膝を乗り出し、黒川は訴えた。

「くどいぞ！ 黒川。儂にも考えがあつてのことじゃ！」

殿に睨まれ、黒川は後退りし、畏まった。

並み居る武将たちの前で罵倒されることなど思いも寄らなかつた。兜首を逃した長井は何の咎も受けず、一番手柄だつたはずの自分は皆の前でお叱りを受けた。長井はすでに殿まで籠絡したのか――。

黒川は自分の立場の危うさを感じずにはいられなかった。皆の憐れみの目が痛い――。

屋敷に帰っても鬱屈した黒川の心は晴れなかった。

「殿より一番手柄であったとお誉めをいただいた」

出迎えにきた妻の千鶴に沈んだ声で云う。

「それはようございました。……あまり嬉しそうではありませんね」

「殿は、次の合戦では長井政晴に軍の指揮を執らせると仰せられた」

「まあ、長井様は出世ですね、まだお若いのに。めでたいことです」

「何がめでたいものか。国が滅ぶかもしれんのだぞ。長井め、義信様だけでなく殿までたぶらかしおって……。何の軍功もあげていない、あんな学者風情に国の命運を託されるとは殿の酔狂にもほどがある」

黒川は不快を顕わにした。長井の重用に今なお納得がいていない。

「殿がたぶらかされているなどと、滅多なことを云うものではありません。殿には殿のお考えがあつてのことでしょう。それとも殿のお考えに異を唱えるおつもりですか」

妻の千鶴が脅かすように黒川に詰め寄る。

「そうではない。そんなつもりなど毛頭ない。長井の小賢しさが赦せんだけじゃ。何も殿に……」

「殿が長井様に軍議をお任せになったのなら、あなたはそれに従うしかないではありませんか。いつまでもそんな風に不満をお持ちですと殿に疎まれてしまうかもしれませんよ。そうなったらこの黒川家は……」

千鶴が憎しみを抱いた悲しい目をする。

「分かった、分かった。もう云うな。少しばかり意に沿わなかったただけだ、もう云うな」

黒川は足軽から剣ひとつで数々の武勲を立てて今の地位にまで昇り、殿の仲立ちで良家の子女であった千鶴を嫁に迎えることが出来た。元々低い身分だったこともあり、勝ち気な千鶴に頭が上がらない。

奥の座敷に明かりを灯し、ひとり黙考する。

“殿に疎まれたなら……”

千鶴の言葉が頭の中に響く。

殿の寵愛が長井に移るのではないかと黒川は恐れた。

いや、すでに移っているのかもしれない――。

黒川の胸中を嫌な風が吹き抜けた。

「なにやら不穏な動きがございます。おそらく戦の準備かと……」

北方の間者より報せが届き、さっそく長井は、殿に事の次第を告げ、義信とともに対策を練った。自分で作成した地図をおもむろに広げる。その地図には戦略の重要地点が克明に記されており、長井はその地の細かな形状でさえも鮮明に思い描くことが出来た。地図を指し示しながら、敵の動きを想定し、敵兵の誘導、味方の隠し兵の場所、挟撃する地点など、味方の動きがどうあるべきかを義信に説明する。義信は喜色満面で膝を叩いた。

「これでは敵は逃れようがない」

ふたりの間で作戦は練り上げられ、いつ敵が攻め入ってきてもいいように準備がなされた。そして北の隣国がついに起ったとの報告があり、軍議が開かれた。当然、その中心に長井はいた。

「この度の合戦は組織立った動きが出来るかどうか、その一点が勝負の分かれ目になります。くれぐれも抜け駆けなどなさらぬように……」

全軍の指揮権を持っている自分が、長井は誇らしかった。軍功に逸る個人行動を戒め、厳しい目で居並ぶ侍大将を見渡す。その中には黒川もいた。一応、恭順の意を示しているが、長井は気がかりだった。黒川の目は不満そうに、あらぬ方を向いていた。

長井は地図を広げ、各隊の大将に動きを細かく指示し、それぞれの役割を説明した。おのおのの隊は散り、受け持つ場所でそのときを待った。

長井の受け持つ本隊が敵の正面に対峙すると、すぐに戦闘が始まった。長井の本隊は押したり引いたりして、徐々に敵を味方の待ち伏せ地点に誘い込んだ。それまでの戦から敵兵は策を弄されているとは思いつかなかったようで、難なく長井の誘いに嵌った。敵兵は待ち伏せに驚き、背後へ引き返そうとした。しかしすぐに横から遊撃隊が現れ、迷走を始めた。次々と繰り出される新手に、いつの間にか敵の全軍が山の急斜面へと追いやられていた。三方を斜面に囲まれた、そこがまさに長井がもくろんでいた地点だった。山の斜面は馬で登るには険しく、行き場を失った敵の隊は右往左往した。斜面を這って登ろうとする雑兵には、上に隠れていた兵からの岩の雨が降り注ぐ。敵はあっけないほど長井の策に嵌り、完全に逃げ場をなくした。逃げ道は正面しかない。しかしそこは重厚に護られている。じりじりと狭められ、長井隊から無数の矢が容赦なく放たれると、敵兵は為す術なく斃れていった。味方の勝利は目前だと思われた。

黒川は焦った。

まずい。このままでは何の手柄も立てられずに合戦は終わってしまう。すべての手柄は憎き長井のものになってしまう。そうになったら――

「どけ、どけ！」

驚いて飛び退く味方を尻目に、黒川は大声を張り上げながら、味方の包囲網を突き抜け、敵の中へ斬り込んだ。個人の手柄を戒めた長井の言葉など露ほども頭になく、あるのは武人としての本能だけだった。斬るべき敵が目の前にいる、それだけだった。獲物の長刀を手に、目についた敵兵を片っ端に斬りつける。

名だたる武将、黒川信光の突進に、敵兵は恐れをなし、慌てふためいた。黒川の長刀から逃れようと囲みの中で必死に逃げ道を探す。

敵兵の真っ只中に忽然と現れた黒川に、味方の兵は矢を射る手を止めた。黒川を射る恐れがあり、また、どうして黒川が敵の中にいるのかが理解できずに呆然とした。

矢の雨がやんだ。矢の脅威がなくなると、敵兵は手の薄そうな箇所を見つけ、我先にそこへ向かって殺到した。黒川が斬り込んだところである。津波のように敵兵が押し寄せ、包囲網に穴があいた。逃げていく敵兵を長井隊の誰もが安心して見やる。黒川も崩された一穴を突き進み、逃げる敵を追った。

馬上の長井は慚然として唇を噛んだ。

「おのれ、黒川め。もう少しで勝てたものを台無しにしくさって……」

はらわたが煮えくりかえり、作戦の瓦解が無念でならない。

黒川に続いて敵を追いかけてようとする味方の兵に、追うでない、と長井は命令した。いかにこれまで軍功があったとはいえ、軍規を乱した黒川のために味方の兵を無駄に危険に晒したくなかった。それどころか、黒川が討ち死にすることさえ望んだ。黒川がいなくなれば、残りの武将は日和見で、追従しか脳のない雑魚ばかり。出世を邪魔だてするものは誰もいない――。

黒川はひとりで敵を追っていた。逃げ遅れた雑兵を何人か斬ったが、そんなものでは気が済まなかった。これまでの戦で手柄を立てられなかったことが一度もない黒川にとって、今回の戦は屈辱的なものになりつつあった。

敵兵を追っているうちに、黒川は自分の軍規違反を悟った。自分の勝手な振る舞いのせいで、せっかく追い詰めた敵を逃してしまった――。殿の厳しい顔が浮かぶ。苛烈な殿がこの失態を不問に付されるはずはなく、詰め腹もあり得る――。このままおめおめとは帰れないと思い、帳消しには出来ないまでも、攻めて厳罰を逃れられそうな兜首を探した。

手柄を立てねば、長井以上の手柄を。それには果たして、兜首はいくつ必要だろうか――。

もはや黒川の目に雑兵は映らなかった。煌びやかな兜首だけを追う。すると程よく、立派な兜の武者が山道の先に見えた。まずはあの首を、と馬を急がせる。先を駆ける武者との距離がぐんぐん縮まる。気づいていないようだ。いくつかの山道を曲がると、その先は二股になっていた。黒川が駆けつけたときには、そのどちらにも先の武者の姿はなかった。

はて。先ほどの兜首はどちらの道に逃げたのか――。

馬を留めて黒川が思案していると、突然、木立の陰から無数の矢が降ってきた。馬を小回りさせ、長刀で振り払ったが、払いきれずに一本の矢が肩に刺さってしまった。急いで馬の手綱を引き、来た道を引き返す。しかし、いつの間にか雑兵に道を塞がれていた。

敵の雑兵は、肩から血を流す黒川を見て奮い立った。いかに黒川が英傑とはいえ、傷を負っている今ならこれだけの人数でかかれば斃せるかもしれないと、怯む様子を全く見せなかった。

黒川は雑兵の中に馬を突っ込ませ、無理から正面突破を試みようとしたが、殺気だった雑兵に驚いた馬はそれ以上前へ進もうとはせず、山道の崖側に寄ってしまった。

後ろへ回り込んだ敵兵に、黒川は背と脚を切られた。苦痛に思わず顔が歪む。長刀を振り回したが、虚しく空を斬るばかりで、持っている腕の力は次第に失せていった。意識さえも遠のきそうだった。押し寄せる敵兵に馬はいななき、威嚇するように前脚を高く掲げた。その拍子に馬が体勢を崩し、黒川は馬もろとも谷に転がり落ちてしまった。

谷に落ちた黒川に矢が降り注ぐ。矢が軀をかすめる中、黒川は足を引きずり、命からがら馬の元に駆け寄った。急いで手綱をたぐり寄せ、馬をひきながらその場を離れる。ふらつく脚で矢の届かないところにまで逃れ、崖を見上げる。そこにはまるで蟻の行列のように、切り立った崖を降りてくる何人もの敵兵の姿があった。黒川の首ともなればその武勲は計り知れない。敵兵が命がけで迫ってくる光景を目にした黒川は、生まれて初めて死の恐怖を感じた。ぐずぐずしてはいられない。すぐさま馬の背に這い登る。幸いにも馬は深い傷を負ってはおらず、勢いよく川を下ってくれた。薄れいく意識の中で、黒川は斬り刻まれた自分の軀を恥じていた。とても陣には戻れないと思った。馬に行方を任せていた黒川は、揺れる馬上でいつしか気を失っていた。

突然現れた血まみれの黒川に、屋敷は騒然となった。送り出した際の華々しさはなく、鎧も兜も刀や矢の傷がつき、血に汚れている。妻の千鶴の差配で黒川の軀は隠すように屋敷の奥へと運ばれた。すぐに医師が呼ばれ、手当が施された。医師の表情は芳しくなかった。低い声で、危うい、と告げる。千鶴は喪心し、傍らにいる息子の時光を抱き寄せた。時光はまだ元服前の身、この家のこれから先が案じられた。不安に苛まれてふと零した涙を、千鶴は急いで拭いた。家人たちが控えており、涙を見せるわけにはいかなかった。それでなくとも、ただの落ち武者となって帰ってきた黒川に失望を覚えているようだった。

翌日、評定が開かれ、長井の兵略を賞賛する声と、黒川の身勝手を非難する声が相次いだ。日和見だった家臣たちは長井へとなびき、黒川に与していた武将たちは顔を上げられなかった。今度ばかりは殿も弁護の余地がなかった。事態があのまま推移していたなら敵を殲滅し、その領土を奪えたかもしれない。小国にとって二度とない千載一遇の好機を逃した事実は大きかった。

殿は、勝利した戦ではないが新しい道が拓け勝ったも同然である、と長井を誉め称えた。反対に、その場にはいない黒川を、おのれの手柄をあげるためにほぼ決まりかけていた勝ち戦を無にしまった大馬鹿者である、と酷評した。

長井の胸は躍った。これで黒川を出し抜けた。これから戦のたびに兵法で活躍し、殿に誉めもらえる、すべての運気が自分に集まってきている、と思った。

千鶴の三日三晩、寝ずの看護のかがあって黒川は一命だけは取り留めた。瀕死の重傷を負い、屋敷に逃げ帰った黒川に待っていた沙汰は当面の蟄居だった。

これまでの武勲を鑑み、殿は苦慮されているようだが、厳罰に処されるのは間違いない――。身から出た錆とはいえ、殿から見放されてしまったという思いを拭いきれなかった。負った傷は日に日によくなっても、黒川は傷心の中にいた。殿の寵愛を一身に受けていたという自負は脆くも砕け、寝ても覚めても殿の怒り狂った顔が脳裏に浮かんだ。

死を持ってお詫びすべきだろうか。あるいは頭を丸め、出家すべきだろうか。儂は武人だから何とか次の戦で活躍し、お詫び申し上げたいが、それは叶わぬことだろうか。殿は儂に何を望まれているのだろう。あれからひと月も経つが、いっこうに連絡がない。儂のことなどお忘れなのだろうか。

儂はどうしたらいいのだろう。

何とか起きて歩けるようにはなったが、黒川は自分のとるべき道が見つからないまま、虚しい日々を過ごしていた。そんな黒川に家人があれこれ声をかけてくる。煩わしかった。話をする気になれず、生返事ばかりしていた。お為ごかしに心配するふりをして、本当はこんな姿になった自分を嗤っているのではないかと疑った。

息子の時光が寂しそうな顔で、座敷からぼんやりと庭をみていた黒川に傷の具合を訊ねた。黒川はおざなりの返事をした。時光が、剣術が上達したかどうか見て欲しい、と云う。まだ傷が痛むから、と黒川が拒むと、見てるだけでいいから、となおも時光がせがむ。苛立った黒川は大きな声を出した。よほど恐ろしい顔をしていたのか、時光が泣きながら走り去った。呵責があった。子供相手に大人げなかったと思う。しかし、黒川は自分の心をどうすることもできなかった。しばらくは身の処し方をあれこれ考え悩んでいたがそれにも疲れ、いつしか何もせず、誰とも話さず、日がな一日、庭を眺めて過ごすようになった。何もかもが厭になっていた。

そんな日が何日も続くと、千鶴や家人たちの態度にも変化が現れるようになった。当初は戦傷の夫を気遣っていた千鶴だったが、容態に心配がなくなると日ごとに小言が増え、邪魔者扱いするようになった。偉丈夫の黒川は何処にいても目につき、それが千鶴の癪に障り、“陰鬱がうつる”と傍に寄るのを避けるようになった。それを見て家人たちも顔には出さなかったが、腹では黒川を見くびるようになった。中には黒川家の先を見据えて暇の願い出を考える者もいた。英傑だった頃の面影はなく、落ちぶれた姿を晒すだけで廃人同様の黒川を皆が敬遠した。いかに黒川が人心に愚鈍であっても、さすがに周りの自分を見る目が妙なのには気がついた。千鶴や家人たちの空々しさに、黒川は自分の居場所がなくなっているのを悟った。

殿から新たな沙汰もなく、黒川は空疎な心のままでぼんやりと座敷から庭を眺めていた。人生そのものといえる殿に見放され、もはや生きていく気力さえ失いかけていた。

武人の鏡だと煽てられ、自分でも儂ほど剛毅な者はおるまいと思っていたが、何のことはない、儂はこんなにも心の弱い人間であったか――。

黒川がまんじりと庭の木を眺めていると、その根元にまだ新しい蟬の抜け殻があった。

儂はまさにあれだ、蟬の抜け殻だ。ただの抜け殻、人の抜け殻だ。誰とも顔を合わせたくない。誰もいないところでひとりになりたいものだ。

黒川は蟬の抜け殻を見つめたまま自分を嘲り、溜め息を吐いた。すると、生きているはずのない抜け殻が黒川を目がけて飛んできた。啞然として飛んできた蟬の抜け殻を目で追っていると、抜け殻は黒川の頬をかすめ、座敷の天井の隅に留まった。

まだ痛みの残る脚を引きずり、逃がさないよう静かに近づく。真下にきて天井の隅を見上げる。瞬きもせずにもその場でくるりと回り、抜け殻の頭から尻まで観察する。が、何処をどう見てもただの蟬の抜け殻にしか見えなかった。背に大きな亀裂があり、中身は何もない。どう考えても生きているはずはなかった。

はて、妙なこともある。抜け殻が空を飛び、天井に留まった。いや、そんなことがあるはずはない。羽がないし、そもそも死んでいる。この抜け殻は以前からここにあったのだろう。しかし、そうすると先ほど飛んできた蟬の抜け殻のようなものはいったい何処へ消えたのだろうか――。

不思議な面持ちで黒川がなおも天井の抜け殻を見ていると、抜け殻はその大きさを次第に増してきた。黒川は驚いて後退りした。抜け殻はずんずん大きくなり、人が三、四人、中に入っても十分な大きさにまでなった。

黒川の目の前に抜け殻の背が迫っていた。魅入られたように黒川は亀裂に手をかけ、抜け殻の胴体の中へ首を突っ込んだ。左右を見やると中は完全な空洞で、黒川はこの奇妙な物体が何なのかを考えた。しかし分かるはずなどない。

儂は夢を見ているのだろうか――。

呆然と空洞を眺め、抜け殻の壁を叩いてみる。

硬い。

この硬さも夢なのだろうか――。

と、手をかけていた亀裂が微かに振動を始めた。驚き、急いで首を抜こうとした黒川だったが、一陣の猛烈な風が黒川の足元から起こり、黒川の躰は抜け殻の中へと吸い込まれてしまった。ふわりと浮き上がり、風が収まるやいなや黒川の躰は抜け殻の床に叩きつけられた。入ってきた背の亀裂が閉じられている。見事に接合していて、亀裂の痕は見えなかった。

黒川は必死に亀裂を探し求め、手当たり次第に抜け殻の壁を引っ掻いた。亀裂の痕跡の継ぎ目を探したが、やはり何処にもなかった。壁を打ち破ろうと拳で思い切り叩く。しかし、いたずらに拳を痛めるだけだった。壁はびくともせず、人の力ではどうにもならないようだ。

いったいどうなっているんだ。何があったんだ。儂は蝉の抜け殻に囚われてしまったのか。ここから出られないのか。

黒川がうろたえていると、抜け殻はまたも振動を始めた。ゆっくり上へと動いているようだ。おぼろに透けて見える座敷がどんどん遠くなっていく。黒川は床に這いつくばった。床の振動で自分の躰が震えているのが黒川には分からなかった。まさに天井から座敷を見下ろしているようになり、抜け殻の動きは止まった。

儂はどうなってしまったんだ。やけに座敷が広く見える。さっきまで見ていた庭の木があんなにも遠くにある。天井にいるようだが、それにしてもはずいぶん高いところにいるようだ。儂はいったい……ひょっとして小さくなってしまったのか。蟬の抜け殻に囚われたまま縮まったのか。なんということだ！ きっと夢を見ているんだ、これは夢に違いない――。

黒川が惑乱の頭の抱えていると、足元の透けて見える座敷で何かが動いた。それは殿の近習の倉沢で、抜け殻の床に屈折され、歪んで見えた。謹慎の様子を見に来たのだろう、これで助かる！ と思った黒川は声の限りに叫んだ。

「助けてくれ！ ここから出してくれ！」

だが、倉沢は上を見ようとはせず、何も聞こえていないようだった。

「おおい！ 儂はここじゃ、ここにいる！ おおい！」

何度も叫び続けたが、倉沢は首をかしげて座敷をひと回りすると、怪訝そうに庭先を覗き、そしてすたすたと座敷をあとにした。

これだけ大きな声で叫んでも聞こえないのか。すべての音はこの抜け殻の壁で遮られてしまうのか――。

ぬか喜びに黒川が気落ちしていると、倉沢が千鶴と家人を引き連れて戻ってきた。千鶴の傍らには時光もいた。あたふたと動き回っている。誰かを捜している。それが自分なのは黒川にも分かり切っていた。

「千鶴、儂はここじゃ！ ここにいるぞ！ 上だ！ 天井だ！ 上を見ろ！」

黒川は狂ったように叫んだが、やはり千鶴にも他の者にも聞こえてはいなかった。誰ひとり天井を見上げようとはしなかった。

なおも手を大きく振り、床を叩き、声を張り上げたが気づいてくれる者はいない。疲れ切った黒川は抜け殻の床に悄然と尻をおろした。

何故見つけられないんだ。天井を見ればおかしな蟬の抜け殻に気づくだろうに。こんなところに蟬の抜け殻があったら妙だろう。何故気づかない。何故上を見ようとしらないんだ――。

目を閉じ、黒川は頭を抱えた。考え込んでいるうちに猜疑心が芽生えた。

わざとではないか。捜しているふりをしているだけではないか。本当は儂がここにいるのをとっくに知っているくせに、わざと気づかないふりをしているのではないか。これ幸いにと邪魔な儂をここに閉じ込めておこうとしているのではないか――。

目を開け、下の様子を窺うと、近習の倉沢と千鶴がなにやら相談している。怪しげなその様子に企みが隠されているようで、黒川は凝視し、耳を澄ませた。しかし声は聞こえず、何を話しているのか分からない。分からないことがいっそうの猜疑心を生む。

千鶴は何かを企んでいる。倉沢とともによからぬことを謀ろうとしている。それは何だ。儂をすでに亡き者にしようとするのか。たとえそうだとしてみてもどうにもできない。この囚われた状況から抜け出すのは不可能なようだ。自分にできることは何もない――。

絶望感に苛まれた黒川は、あれやこれやと考えることに嫌気がさし、自分を悩ませるすべてから逃れたいとなった。横になり、すべてを忘れようと深い眠りに就いた。

殿からの新たな沙汰はないと伝えに来た倉沢に、千鶴は責められた。これまでの武勲を鑑みて寛大な御心を示してくださり、傷が癒え次第、元気な姿を見せよ、と仰せられたというのに、夫が蟄居を破ったのでは話にならない。殿の怒りに触れるのは必定だった。

千鶴は焦った。焦りながら夫を恨んだ。こんな大事な時期に屋敷をあける夫の気が知れない。屋敷の近くにいるはずです、と言いつくろい、家人たちに捜させた。千鶴は、黒川が退屈しのぎに近場をほっつき歩いているのだろうくらいにしか思っていなかった。ついさっきまで屋敷にいたのだ、あの躰で遠くまで行けるはずがない、捜せばすぐに見つかる、そう推し量り、それほど悲観してはいなかった。

家人たちが田畑を過ぎ、雑木林の中に入る。雑木林から川へと移り、沼の方へと消えていく。門の傍らで見守っていた千鶴は、厭な予感がして居ても立ってもいられなくなり、駆け出した。黒川はたまに沼で鮎釣りをしていた。歩けるようにはなったが黒川の脚はまだ弱く、脚を滑らせてそのまま深みにはまったのかもしれない。武士が沼で溺れ死ぬなど、こんな無様なことはない。

下女を伴って沼に着くと、沼では押し黙った家人たちが棹で底を探っていた。今に棹の先に何か当たるのではないかと恐れ、皆の顔がこわばっている。しかし、棹の先に何か当たることはなかった。厭な予感が外れ、千鶴は安堵の吐息を漏らした。が、その顔はすぐに曇った。何処にもいない。屋敷にも近場の何処にも夫はいない。蟄居の身でありながら杳として行方がしれない。

そんなはずはない、どこかにいるはずだと思いながらも厳しい現実が眼前に迫る。倉沢が屋敷で千鶴の具陳を待っている。

弁明の言葉が思い浮かばないまま、千鶴が虚ろな心で屋敷に戻ると、奥座敷にいるはずの倉沢が門のところにいる。心配のあまり様子を見に来たようだ。不意に現れた倉沢に、千鶴は戸惑う自分を抑えきれず、目を伏せてしまった。

「どうやらおられなかったようですね」

事態を察し、倉沢が苦々しく云った。

「残念ながら……」

千鶴は消え入りそうに身を縮めた。

「屋敷にも近くにもおられない。困ったことだ」

倉沢の顔が険しくなる。

「近くにいないとなると遠くか……」と呟くように云う倉沢の言葉に、千鶴ははっとなった。

遠くへ行ったということは家を捨てたのか。毎日毎日、陰鬱に過ごしていた夫の顔が思い浮かべられる。それに気づいていながら冷淡に扱った自分がいた。たいしたことではないと思い邪険にした。夫の心底を見ようとせず、ましてや理解しようなどと考えもしなかった。分かち合おうともしなかった。自分の誠意のなさに失望した夫は、治りきっていない躰で後先考えずに家を出て行ったのかもしれない――。千鶴は悔恨の念にかられた。

「ひょっとしたら出奔したのかもしれませんが」と、沈痛の声で云う。

「出奔？ 黒川殿がまさか……」

信じられないといった顔の倉沢に、千鶴は恥ずかしさが込み上げてきた。

「あり得ることです。わたしが至らないばかりに……」

「あの黒川殿が出奔とは……にわかには信じられないが、覚悟の上なら旅の支度などなさっているでしょう。調べられよ」

急かせる倉沢に千鶴は頷き、家人たちに調べさせた。黒川の身の回りのものがなくなっていないかどうか、家人たちは必死に調べたが、なくなっているものは何もなかった。旅の道具も着るものも揃っている。着ていたものが見あたらないだけだった。

倉沢が腕を組み、ううん、と呻る。

「旅に出るには用意をしていないようだ。おそらくそう遠くへは行っておられまい。誰かの家を訪ねるようなことは云っておられなかったか」

千鶴は首をかしげた。思い当たるところはない。

「そのようなところは……」

「着の身着のまま遠くへ行くはずはないと思うが……」

訳が分からないといった態で首を捻る倉沢の横顔を、千鶴は縋る目を見た。この倉沢に黒川家の将来はかかっている。倉沢が事の次第を殿に告げればどうなるか、それは火を見るよりも明らかだった。

「なにとぞこのことは内密に願えないでしょうか」

千鶴は必死の思いで訴えた。

「儂も何とかしてやりたいが、何処にもおられないというこのような状況では……」

倉沢が苦悶の顔で云う。そして考えを巡らせ、一つの案を捻り出した。

「殿には、黒川殿はまだ経過が思わしくなく、床に伏せておられる旨伝えておきましょう。しかし、隠しておくにしても限度がありますから、七日のうちにはきっと黒川殿を見つけ出してください。よろしいですね」

倉沢の言葉を聞いて千鶴は、ありがとうございます、と涙を零して礼を云った。倉沢にしても殿に嘘の報告をするのは危険な賭けのはずだ。そこまでしてくれると思うと、感謝の気持ちでいっぱいだった。長年の親交の賜物だろう。憂慮に満ちていた千鶴の心に微かな希望の明かりが灯った。

ほっと胸をなで下ろすと肩の力が抜けた。とりあえずの危機は脱した。しかし、七日という日数の短さが気に掛かった。七日のうちに見つかる保証はなく、七日を過ぎれば黒川家は――

「七日でございますか……」

言外に、もう少し何とかならないか、との響きを含ませて千鶴は云った。

倉沢が渋い顔をする。

「七日経っても見つからないのであれば、覚悟の上で遠くへ出奔されたのでしょうか。見つけ出すことは叶いますまい。あるいは……」

黒沢が言葉をとめた。しかし、千鶴は黒沢が何を云わんとしたのか察した。夫はすでに何処かで野垂れ死んでいるのかもしれない。考えないようにしてもどうしても頭から離れず、暗澹たる思いがした。

「それにしても……わたしは昔から黒川殿を知っておりますが、こんな風に姿をくらますとはとても考えられません。殿のために命を賭して立ち働いてくれたのに……。何かの間違いであって欲しいと思っています。それに……こう申しては何ですが、千鶴殿は本当に黒川殿の身を案じておられるのか……わたしにはそうは思えないのですが……。家のことも大事だが、それ以上に黒川殿も大事なはずです。わたしが殿に嘘を吐くのは黒川家のためではなく、黒川殿のためであるのをお忘れなく」

倉沢が諭すように云う。

見透かされている。黒沢の目にはすべてが晒されているように千鶴には感じられた。この期に及んでも家のことを第一義に考えている自分はなんと薄情者か、と胸が痛んだ。夫の心配よりも家の将来を案じるような、こんな妻に夫が愛想を尽かすのも当然だ。

千鶴は心底己を恥じ、悔いた。

「ああ……」と呻き声を漏らし、床に突っ伏した。その目からは慚愧の涙が溢れた。

「きっと……きっと見つけてみせます。この命に代えましても……」と、涙声で千鶴は誓った。すでに七日の期限はどうでもよくなっていた。ただ生きて会えることだけを願った。

寝返りを打った拍子に目が覚めた黒川は、枕の代わりにしていた腕をさすった。痺れており、床の細かな紋様がうつっている。痺れを治そうと腕を振りながら、黒川は眠い目で周りを見渡した。

すべては夢であったと笑いたかったが……どうやら夢ではなかったようだ。抜け殻の床や壁は手で触れられるし、その感触が認識できる。ひんやりとして硬い。夢でないとしたら、儂はいずれこの中で死んでしまうのだろう。この抜け殻に囚われたまま屍となり、誰にも看取られることなく息絶える――。

相変わらず蟬の抜け殻に閉じこめられている今の状況に、黒川は溜め息を吐いた。抜け殻の床の何処にも元の亀裂はない。その床には誰もいない座敷が歪んで映っているだけだった。

ふと、黒川が抜け殻の奥、蟬の頭の方に目をやると、人が這って通れるほどの小さな穴があった。昨日はなかったはずだが、動転していて気づかなかったのだろうか。それとも寝ている間にできたのだろうか。黒川は腰を上げ、脚を引きずって穴に近づいた。腰の高さにある穴の中は真っ暗で、さらに奥へと続いている。

この穴は何処へ続いているのだろうか。ひょっとしたらこの穴の先から外へ出られるかもしれない。

黒川は穴に這い入り、先を急いだ。穴はそれほど長くはなく、しばらく這って進むうちに何やら明るい場所に出た。明るいというよりただ白い。そこは靄が立ち込めていて、まるで雲の中のようなようだった。

狭い穴を通り抜けた黒川は、広い空間を楽しむかのように伸びをひとつした。どういう訳だかこの場所が黒川にはとても心地よく感じられ、黒川の心は魅了された。全身の力が抜け、体が軽くなった。今まで思い煩っていたことが嘘のように、晴れ晴れとした気持ちに包まれた。

これはまた奇妙な場所へ出たな。ここは極楽か。儂は死んだのか。

黒川が少し先へ歩き出すと、それにつれて靄が晴れ、先が開けてきた。治りきっていないはずなのに、痛みもなく普通に歩いている自分の脚が黒川は不思議だった。しばらく歩き、後ろを振り返る。すると先ほど通った穴が靄の中に見えなくなっていた。元の場所に戻れないかもしれないと微かな不安を抱いたが、それでも黒川はゆっくり前へ進んだ。求めているものがこの先にあると思えてならなかった。

さらに歩いたところで白い靄の中に黒い塊が浮かんでいた。近づくとそれは家だった。

我が家だ。儂の住み慣れた家だ。儂は自分の家に戻ってきたのか。いや、そんなはずはない、周りの景色が全然違う。極楽にも儂の家があるのだろうか。

家に上がり込み、隅々まで確かめる。

違う。儂の住み慣れた家ではない。似ているが何かが違う。何処が違うのか――造りは同じだが、別の家を感じる。

家があるということは、誰か住んでいるのか。

「もし、誰かおられますか。もし……」

しかし、黒川が呼びかけても返事はなかった。ただ虚しい寂漠があるだけだった。

「誰もいるはずがないか、こんなところに」

不意に、座敷の天井に何かがあった気がして、黒川は屋敷の奥へ向かった。天井の隅を見上げたが、そこに期待したようなものは何もなかった。

はて、元の家にはあそこに何かがあったはずだが、何だったのだろう。肝心のものがあつたはずだが思い出せない。儂は何を探したかったのだろう。

黒川は両手を枕にして寝転がった。じっと天井を見つめたが、どうしても自分の探し物を思い出せなかった。

思い出せないものは仕方がない。

黒川は外の白い霧の先に何かないか調べることにした。この家のほかにも何かあるかもしれないし、自分のほかに誰がいるかもしれない。

外へ出た黒川に、霧は不思議な模様を描き出しては消え、また別の模様を描いては消えた。微妙な陰影が見ようによっては馬に見えたり、人の姿に見えたりした。それはまるで生きているようだった。

歩いて歩いても白い霧は途切れず、屋敷からまっすぐ歩いているはずだったが、屋敷に戻ってしまった。目印になるものが何もないだけに、途中で気づかないうちに右か左へ少しずつ曲がったのだろう。今度は別の方向へ歩いたが、それでもいつの間にかまた屋敷に戻ってきた。もう一度別の方向へ歩いても結果は同じだった。

この霧の中は広いように思えたが案外狭いな。それに、どういう訳かどっちへ行っても、結局、元の屋敷に戻ってしまう。ここにはこの屋敷だけでほかには何もなさそうだ。そして誰もいない。屋敷と儂だけのようだ。――はて、儂はこの霧の世界へはどうやってきたのだろう。這ってきたような気がするが――この世界のすべてが曖昧模糊としている。頭の中まで霧が立ち込めているようだ。

黒川は屋敷に戻り、奥の座敷で腰を下ろした。

ここではずっと陽が昇らないが、いったい今は昼なのだろうか、それとも夜なのだろうか。昼夜の区別はあるのだろうか。ここへきてずいぶん経った気がするが、いっこうに腹が減らない。ここに時はあるのだろうか。ここはやはり極楽か。儂ひとりの極楽か。――極楽かもしれない。ずっとひとりであるのに寂しいとか退屈だとか少しも思わない。かえって気が楽で心地いい。何ともいえぬ満ち足りた気がする。これが浄土というものなのか――。

座敷の外では白い霧が絶え間なく模様を作り出していた。

美しい模様に黒川の目は釘付けだった。

時に優美な舞いのような模様が浮かび上がり、それはまるで美しい女官が舞い踊っているようだった。演奏者らしき人物が見えてくると、音まで聞こえてきそうだった。いや、実際に黒川の頭の中では心を溶かす楽器の音が鳴っていた。現れては消え、次々と浮かび上がってくる模様に黒川は時を忘れた。雅な舞いなど見たこともない無骨な黒川だったが、いつまでも見飽きることはなかった。

何度も眠りに落ち、いつものように黒川が靄に浮かび上がる模様を眺めていると、ひとりの武者が現れた。武者は勇ましく刀の振り回している。

あそこに見える武者はまるで儂のようではないか、ずいぶんと勇ましく見える。剣の使い方などまさしく儂ではないか。

黒川は満足そうにその武者の模様を眺めていた。

あの武者が儂に似ているといっても、ここにいる儂はいったい誰なのだろう。名前は何というのだろうか。歳はいくつなのだろう。四十くらいだろうか。どんな主君に使えていたのだろうか。――まあ、気にしても仕方がない。ここにいるのは儂ひとりだし、儂が誰だろうとどうでもいいことだ。自分が誰だか分からないからといって困ることはないし、ほかの者に迷惑をかけることもない。なにせ儂はここにいる唯一の人間なのだから。この世界は儂ひとりのものだ。すべては思いのまま。誰にも遠慮する必要はなく、やりたいようにやれる。それが儂には許されている。

黒川は孤独を堪能した。眠りたくなったら眠り、起きたくなったら起きた。何をするでもなく、白い靄の作る模様に心を預け、ただぼんやりと時を過ごした。どれくらい経ったのか分からないまま、何も考えない時が続いた。それは甘美な惑溺の時間だった。

「なに！ 黒川殿が出奔したかもしれないだと！」

問者からの報告に、長井政春は驚き、そしてほくそ笑んだ。

黒川の屋敷に出入りしている村人に確かめたところ、ここしばらく誰も黒川を見ておらず、屋敷の近隣で家人が何かを探し回っていたらしい。戦での傷が元で、すでに死んでいるのではないかと噂する者もいると云う。死んだのであれば秘匿するはずがないから、不始末を恥じて出奔したに違いない。蟄居の身でありながら屋敷を不在にすることは重罪だ、殿は赦されないだろう。もはや黒川が城に戻ってくることはない。この国に自分の栄達を邪魔する者はいなくなった。

それでも長井は用心深かった。

「今しばらく黒川殿の屋敷を見張っておれ。剛毅だけが取り柄の黒川殿が策を弄するとは思えんが、万が一のこともある。人の目につかないところで養生しているのかもしれない、引き続き目を離すな」

問者に厳しく命じた長井だったが、問者が立ち去るとその顔は喜悦に崩れた。

黒川に策を弄するほどの頭はない。

後日の問者の報告に、長井は黒川の出奔が決定的になったのを確信した。問者の話では、黒川の妻、千鶴が何人もの祈祷師を呼び、黒川の無事の帰還を祈っていたという。もはや黒川が屋敷内にいるはずはなく、出奔したのは間違いなかった。

「儂が見舞いに行ったら千鶴殿はなんとするだろう。臥しているだけなら見舞客を上げないわけにはいかないが、諸々の理由をつけて断るだろうな。面白くなってきた。すぐに支度をいたせ、黒川殿の屋敷へ参る」

長井はすぐに口取りに馬をひかせ、黒川の屋敷へ向かった。

見舞いに来たことを家人に告げると、長井の予想どおり、黒川の家人は見舞いを丁重に断った。

「旦那様には未だ傷が完治なされず、床に臥せられたままでございます。奥方様には旦那様の看病に躰を壊され、長井様のお出迎えもできないような状態です、今日のところはなにとぞお引き取りを」

ほころびそうになる顔を長井は必死に抑えた。

「千鶴殿も病に伏されていたとは……これはますます見舞いを申し上げなければなりませんまい」
「お心持ちは嬉しいのですが、奥方様よりきつく云い渡されておりますゆえ、なにとぞ今日のところは……。おふたりの具合がよくなりましたならこちらからご挨拶に伺いますので……」

「元気を出してもらおうと思ったのに会えぬとは残念なことじゃ。お二人とも床に臥されているのであれば何かと大変であろう、儂から殿に申し上げておこう」

長井は黒川の家人を、すべてを知っているぞと威圧するように見据え、馬を引き返させた。事態を告げたときの殿の驚きと怒りの顔が思い浮かんだ。

勝った。黒川に勝った。

長井は馬上で高笑いをした。傍らの口取りが、きょとんと長井を見上げている。目があった長井は、自分だけが勝利を知っていることが可笑しく、高笑いを続けた。

長井の応対に行かせた家人がおろおろと戻ってきた。

千鶴は長井が黒川家の変事を察しているらしいと家人に困苦の顔で告げられ、絶望感に苛まれた。倉沢と取り決めた日時の期限にはまだ間があるが、その前にことは露見しそうである。倉沢のせっかくの骨折りも無駄になりそうだ。倉沢にも累が及ぶかもしれないと思うと、千鶴は申し訳なさでいたたまれなくなった。

家人が下がった後、千鶴はひとり泣いた。

何もかもが終わってしまうと覚悟はしたものの心残りがあった。夫と交わした最後の言葉がまざまざと蘇る。夫を罵倒した言葉――

“陰鬱がうつる”

何という言葉をついたのだろう。

会いたい――。

会って心なくも云ってしまったことを詫びたい。

いつの間にか傍らに息子の時光がいた。時光も泣いていた。

「父上は何処に行かれたのですか」と訊く。

「分かりません。きっと母に嫌気がさして何処かへ行かれたのでしょう」

「そんなはずはありません、父上がわたしたちを見捨てられることなど」

決然と云い、時光が白い雲のかかった空に目を向ける。そこに父がいるかのように呼びかける

。

「父上、父上。何処におられるのですか」

座敷に臥していた黒川は、何かの物音で目を覚ました。何かを聞いた気がして音のする方を向いたが、それが何処から聞こえてくるのか分からなかった。右を向いても左を向いても聞こえる。物音は次第にはっきり聞こえるようになり、直接頭の中に響いていた。

「父上、父上。何処におられるのですか」

その声に黒川は聞き覚えがあった。

確かに聞いたことのある声だ。父上と呼びかけているが、儂の子だろうか。儂は四十くらいの歳だから、相応の子がいてもおかしくない。声からして十歳くらいだろう、儂を捜しているようだが……。子の名前は何というのだろうか。子がいるということは妻もいるのだろうか。妻の名前は……。その容姿はどんなだろうか。

儂は何故こんなところにいるのだろうか。

今度は屋敷の外から声が聞こえた気がして、黒川はふらふらと外へ出た。外は相変わらず白い霧が立ち込めている。声の方向を確かめようと黒川が首を回すと、目の前の霧が急に揺らめき、子供の姿になった。子供の霧は刀を持って剣術の稽古をしている。打ち込みを繰り返している。その傍らに女が現れ、ふたりの霧は静かに佇む母子の姿になった。ふたりとも黒川を優しい目で見つめていた。

我が子、我が妻だろうか。

おそらくそうだ。儂はこのふたりと暮らしていたのだ。このふたりは今何処に――長い間忘れていた何かが呼び覚まされ、黒川は胸に込み上げてくるものを感じた。躰が震え、息が止まりそうだった。

会いたい――。

母子の霧が黒川を招くように移動を始めた。奥に向かっている。

こっちへこいというのか。

黒川は母子の動く方へと急いだ。動く霧を見失わないように必死に後をつけた。やがて母子の霧は動きを止め、静かに消えた。そこには人がやっと通れるほどの穴があった。

前にここを通った気がするが――

黒川は中を覗き込み、そのまま這って進んだ。進むにつれて逸る気持ちを抑えきれなくなり、言葉にならない呻き声を発しながら先を目指した。そして穴を抜けると別の奇妙な場所に出た。

ここには覚えがあるぞ、蟬の抜け殻の中だ。

黒川は確かめるように壁を叩いてみた。やはり硬い。

足元を見た。覚えのある座敷が歪んで見えた。

儂がいた座敷だ。この下に儂が暮らした家がある。儂は天井に飛んできた蟬の抜け殻に囚われ、白い霧の世界の屋敷で過ごしていた。心地いい場所ではあったが、しかし本当の儂の家はここなのだ。ここしかないのだ。

懐かしい思いで黒川が見下ろしていたそのとき、女と子供の姿が目に映った。

時光！ 千鶴！

思わず口をついて出た名前が愛しかった。その名前を、声を限りに何度も叫んだが、その声は届かなかった。下のふたりには聞こえないようで、素知らぬ顔をしている。黒川は膝をつき、抜け殻の床を力の限り叩いた。手の肉が破れるほど強く叩いた。その音は抜け殻の中にどんと響き、耳が痛くなるほどだったが、それでも下のふたりは何の反応も示してくれなかった。

赦してくれ。そなたたちのことをすっかり忘れ、別のところで過ごしていた。放っておいたまま何日が過ぎたのだろう、赦してくれ。

抜け出せぬ悔しさに、黒川はなおも床を叩いた。すぐそこに妻と子がいるというのに、手を伸ばせば届きそうなのに、会えない悔しさに涙があふれた。床に突っ伏したまま、声を上げて泣いた。涙は頬を伝い、抜け殻の床へと落ちた。一滴、二滴と落ち、やがて床にしみた。すると、涙のしみた跡が細長く伸びて一筋になり、そこから目映いばかりの光が放たれた。抜け殻の床がゆっくり開き、黒川は座敷に落ちていった。抜け殻から解放された黒川の躰は元の大きさに戻り、涙に濡れたその顔は喜悦の笑みに満ちた。

突然現れた黒川に千鶴も時光も驚いたものの、すぐに再会を喜び、涙した。

「ずいぶんと心配をかけたな、赦せ。こうしてまたそなたたちと会えるとはこの上ない幸せだ」
黒川は両手に妻と子を抱いた。

「私の方こそ謝らねばなりません。わたしは薄情な妻でした。思いやりの心に欠けておりました。申し訳ございません。それでも祈りが通じたのでしょう、神仏はこんなわたしをお見捨てになりませんでした」

「神仏とは……」

不審がる黒川に、千鶴は加持祈祷の話聞かせた。その横から時光が黒川の袖を引っ張る。

「それにしても父上は何処におられたのですか」

その声には拗ねた響きがあった。

黒川は天井の隅を静かに指さした。

「あそこに蝉の抜け殻があるだろう。信じられないだろうが、儂はあの中にいた」

千鶴も時光も怪訝そうに、天井の隅にある蝉の抜け殻を見上げた。

「あんなところに蝉の抜け殻があったなんて少しも気づきませんでした。そんな不思議を起こしそうには見えませんが……」

「儂も今でも信じられぬ。だが、ずっとあの中に囚われておったのだ……」

黒川がそう云うと、蝉の抜け殻はゆっくり天井を飛び立った。その飛び行く先を三人の目が追う。抜け殻は庭先へ向かい、中空をひと周りして彼方へと消えていった。

「儂はまさに空蝉であった……」

心に新たな温もりが湧いてくるのを感じながら、黒川はもう一度、妻と子をその胸にしっかり抱いた。

長井政春は人生最良の日になると信じ、意気揚々と殿の元を訪れた。

問者が下女に錢を握らせて屋敷の隅々まで調べさせたところ、やはり黒川は何処にもいなかった。もはや疑念の余地はない。

「殿に申し上げます。黒川殿の出奔のこと、お聞き及びでしょうか」

悲嘆の態を装い、長井は話を始めた。

「なに！ 黒川が出奔したと……まことか！」

殿が目を丸くする。時が止まったかのように、瞬きをしない。

「残念ですが……黒川殿は屋敷にはおられません。殿の信を失ったことで自暴自棄となり、こっそりと何処かへ行かれたのでしょうか」

「あれしきのことで……。武人の中の武人と思っていたが……」

「武人ではありましたが、それは戦のときばかりのようで……。わたしが見舞いに参りましても会おうとはなさいませんでした。千鶴殿におかれましても看病疲れということでしたが、いかにも仮病を使っているようでして、黒川殿の出奔を隠そうとなされており。付近を探索なさったり祈禱をなさったりと、ことは明らかです」

殿が黙り込んだ。黒川の出奔をにわかには信じられなかったようだが、長井の話を聞いて妄言ではないと悟ったようだ。驚きの顔が苦々しくなる。

沈黙の後、殿がおもむろに口を開いた。

「出家でもしたか」

「遠くの寺は分かりませんが、近在の寺にはおられません。無骨者の黒川殿が仏門に入られるとは思えませんが……」

「ただ何処かへ姿を隠した……と申すか」

殿の言葉に長井は大きく頷いた。そして身を乗り出し、声を潜めた。

「敵国へ寝返られたのかもしれませんが。敵国で黒川殿らしき者を見たと申す間者がおります」

長井は自分で作ったこの虚言を広めるつもりでいた。誰も黒川の行く先を知らないのであれば、たとえ今は虚言であってもそれはやがて真実となる。たとえ黒川があとでのこのご姿を現したとしても、その頃にはもう黒川の云うことを信じる者はいないだろう。黒川の信任は地に墜ち、黒川の復帰を待ち望んでいる者は口を閉ざさざるを得なくなるだろう。そうなれば自分の地位は磐石となるはずだ。

殿は茫然となった。

「わしを裏切りおったと申すか、あの黒川が……。目をかけておったのに……。赦せん。よりによって敵国へ寝返ったか。その話が事実なら大変なことだ。敵方は百人力を得たことになる。こちらの損失は計り知れないぞ」

「殿にはお忘れでしょうか、この長井がいることを。黒川殿がいかに優れた武人であったとしても、戦はもはやひとりの力で決するものではありません。この長井にお任せあれば、先の戦のごとく敵を蹴散らしてご覧にいきましょう」

長居は自信たっぷりに自らを売り込んだ。

「そうじゃな。もはや頼りになるのはお主しかいないようだ。息子の義信ともどもこの国を盛り立ててくれ、頼んだぞ」

「ははあ、この命に代えましても」

思惑通りにことが運び、長井は喜びに満ちて深々と平伏した。長く続いた不遇の日々から開放され、今日から栄光の日々が始まると信じて疑わなかった。

そのとき、近習の倉沢が入ってきて殿に近づき、なにやら耳打ちした。倉沢の報せに殿の顔がみるみる紅くなる。何かにお怒りのようだ。

「儂に目通りを願い出た者がおる」

お目通りの者が殿の怒りの元凶のようだ。

「それではこの辺で失礼を……」

関わり合っては損になる。長居は腰を上げて帰ろうとした。

「まあ、お主にも馴染みの者ゆえ、遠慮せず会っていくがいい」

訝しがる長井を尻目に、殿は倉沢に訪問者を通すよう命じた。

やがて訪問者が倉沢に伴われ、静々と殿の前に姿を現した。

訪問者を目にした長井は、幽霊でも見たかのように蒼白となった。

「先の合戦での身勝手な振る舞い、お赦してください。さらに、殿には長いことご心配をおかけしまして申し訳ございません。お陰様で傷はすっかり癒えましてございます」

登城してきた黒川が平伏して云った。

「待っておったぞ、黒川。倉沢の話では、登城はいつになるか分からないということだったが...
...なんにしても傷が癒えてよかった」

「一刻も早くお詫びに参上しなければと思っておりましたが、なかなか傷が癒えませんで遅くなってしまいました」

「詫びなどもうよい。なますのように斬られ、死ぬほどの苦しみを味わったのだ、赦すとしよう。それに、いきなりの大幅な戦法の変更にカボチャ頭がついていかなかったのであろう、なあ黒川」

「ははっ」

殿の戯言に黒川が苦笑する。

可笑しくて堪らないと、ひとしきり声を上げて笑ったあと、殿は静かに話を始めた。

「優れた武人であるお主にはこれからも活躍してもらわねばならない。しかし、時代は動いている。一人ひとりの器量に頼る戦は早晩廃れるだろう。これからは長井の云うように組織だった戦法が必要だ。儂はもう歳……先人の務めとして、後に続く義信に道筋を遺してやりたいと願っている。そのために先の合戦では長井を重用した。期待に応え、長井はよくやってくれた。儂はこれでこの国をいつ義信に譲ってもいいと安心した。しかし……」

黒川に向けられていた殿の顔がゆっくりと長井に移った。射抜くような厳しい目をしている。

「お主が出奔したのではないかと申す者がおるが……」

長井を見やりながら殿は黒川に云った。その声は冷たく、鋭い。

黒川は改めて畏まった。

「滅相もございません。屋敷より一歩も外には出ておりませんし、とても外へ出て行けるような状態ではございませんでした」

「お主が敵国に寝返ったのではないかと申す者がおるが……」

「何ということ。忠臣は二君に仕えず。この黒川、殿以外にお仕えするお方はございません」

殿は鷹揚に頷き、なおも長井を見据えていた。その顔は冷厳で、目には憎しみが満ちていた。

長井は躰が硬直し、震えが止まらなかった。

「何か申し開きがあるか、長井！」

長井はひたすら額を床にすりつけた。恐ろしくてならなかった。

「問者の申すこと、無闇に信じ過ぎました。申し訳ございません」

「儂を謀るつもりか。空言を用い、黒川を陥れようとしたのであろう。違うか、長井！」

「けしてそのような……」

長井はうろたえた。言い訳を考えるが、頭が混乱して何も思い浮かばない。

「もうよい。武人にあるまじき卑劣な行為、赦せんぞ。目障りだ、とっとと出て行け！」

殿の怒りは烈しかった。

長井は這う這うの態で殿の元を立ち去り、一目散に屋敷目指して馬を走らせた。どうしてこうなったのか、狐につままれたようで訳が分からなかった。

黒川が屋敷にいなかったのは確かだし、外から戻ってきた様子もなかった。祈祷師は黒川の無事の帰還を祈っていた。銭をもらった下女が嘘を吐くとも思えない。それでも黒川は何処からか殿の前に現れた。屋敷内に隠れていたのか。そうとしか考えられないが、しかし、なぜそんなことをする必要があるので――。

屋敷に帰って座敷に腰を下ろすと、長井は少しだけ落ち着きを取り戻した。

ぼんやりと外の庭を見やる。

黒川が何処にいたかなどもうどうでもいい。問題はこれからどうなるかということだ。殿のあのお怒りではおそらく蟄居では済まないだろう。どんな処罰を下されることやら。今日は人生最良の日となるはずであったのに、最悪の日となってしまった。あっという間に奈落の底に落ちてしまった。儂はもうおしまいだ。この失態はどうやっても取り返せない。ああ、何ということだ。放逐させられ、この国にはもういられないかもしれない――。いっそ他国へ出向き、しかるべきお方に仕えようか。いや、駄目だ。名前もたいした実績もない儂を召し抱えてくれるところなどあるはずがない。ならば出家か。儂はどうすればいいのだろう――

長井の躰を虚ろな空気が包んだ。溜め息を吐き、自失していると、目の前を何かが横切って飛んでいった。長井が目であとを追うと、蟬の抜け殻が座敷の隅の天井に留まっていた。

了